　私は、卒業論文でシェイクスピア作品における「悲劇性」と「死生観」をテーマとして取り上げたいと考えている。その理由は、シェイクスピア作品の研究は私が最も興味を持っている分野であり、英文学コースにおいても最も深く学んできた分野だからである。

私はこれまで、英文学コースにおいてシェイクスピアに関する冬木先生の講義を受講し続けてきた。その中で、『ハムレット』や『リア王』、『夏の夜の夢』といった主要な悲劇、喜劇作品に触れ、シェイクスピアが描く登場人物たちの行動や心情をさまざまな視点から考察してきた。その中で私が特に興味を持ったのは、登場人物たちが自らの運命に向き合う際に見せる「悲劇性」や、彼らが死に対してどのような態度を取るかという「死生観」の違いである。こうしたテーマは、シェイクスピアの多くの作品に共通して見られる要素でありながら、個々の作品で異なる形で表現されている。こうした作品間での違いや共通性に着目して作品を見ていくことで、シェイクスピア自身が生きること、死ぬこと、そして人間の本質についてどのように考えていたのかを探ることができるのではないかと考えている。

具体的に取り上げる作品としては、『リア王』、『ハムレット』、「夏の夜の夢」などを考えている。『リア王』では、老王リアが自己の過ちに向き合いながら、苦悩の末に没落していく様子が描かれている。一方、『ハムレット』では、主人公ハムレットが父の死をきっかけに、復讐と自らの存在意義を問い続け、最終的に自らの運命と死に直面する姿が描かれている。これらの作品における死生観の違いや、主人公たちが抱く悲劇性は、シェイクスピアの作品を比較する上で重要な要素であると考えており、卒業論文ではこう言った点に着目していきたいと考えている。また、『夏の夜の夢』などの喜劇作品においても、悲劇性や死生観が内在しているのではと考えている。悲劇作品だけでなくこうした喜劇作品も比較対象として取り上げていき、より深い視点からシェイクスピアの価値観について考察をしていきたい。

論文作成の構想については、まず『リア王』、『ハムレット』、『夏の夜の夢』のテクスト分析を進めていく。具体的には、それぞれの登場人物がどのような状況で死に向かい、どのように悲劇的な結末を迎えるのかを詳細に検討する。また、登場人物の台詞や行動から、彼らが死や運命に対してどのような態度を持っているのかを分析し、その背景にある時代的な文脈やシェイクスピア自身の人生観との関連性を探っていきたい。こうしたことを踏まえて、既存のシェイクスピア研究における「死生観」や「悲劇性」に関する議論も参考にしながら、これまでの研究と自分の考察を比較し、独自の視点を交えた論を展開していきたいと考えている。

卒業論文の執筆を通して、シェイクスピア作品における「悲劇性」と「死生観」が、単なる物語上の要素ではなく、シェイクスピア自身が抱いていた深い人間観察や人生に対する洞察を反映しているのではないかという仮説を検証していきたいと考えている。そして、それをここまでの学びの集大成としていきたい。

・リアとハムレット研究がメイン、悲劇論

・喜劇の中の悲劇性という意味で夏の夜の夢

・テキストを２、３点図書館で集める（悲劇論、ドーバイブリューソン、６悲劇について）

文献

・シェイクスピアの悲劇 / 日本シェイクスピア協会編

1988.5

→ハムレット、オセロー、マクベス掲載

著者の意見がもろに書いてあるため引用する時は注意しないといけない

・シェイクスピア悲劇の家族 / 横森正彦 著

→ハムレット、リア王、ロミジュリ、マクベスなど掲載、それぞれの登場人物の家族とのつながりやそこに生まれる悲劇を中心に述べられている

・狂気と運命は共通性あり、運命と意志

・ロミオとジュリエットにも言及した方がいいかも

・喜劇入れる（夏の夜の夢では運命が妖精として可視化）

メモ

・悲劇に喜劇性のあるキャラがいなくなった時の読み手への影響

・作品一つでもいいかも

→複数であれば的確な根拠が必要。深く触れたことがあるからではだめ。